

# 横浜開港資料館

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

紀要 第38号  
令和4年3月

中山恒三郎家資料と地域史研究の展望

— 横浜市都筑区川和町の近現代史を中心に —

吉田 律人 1

江戸菊の近代

佐藤 大悟 18

インタビュー記録

太田宇之助父娘と中国

— 太田宇之助長女、縫田暉子氏に聞く

望月 雅士 33  
中武香奈美

インタビュー解説

太田宇之助と中国人留学生

望月 雅士 63

# 太田宇之助父娘と中国

——太田宇之助長女、縫田曄子氏に聞く

望月 雅士

中武香奈美

## はじめに

太田宇之助（一八九一～一九八六）は、大正から昭和にかけて中国問題専門家として活躍したジャーナリストである。二〇〇二年、横浜開港資料館は、太田の長女、縫田曄子氏（神奈川県湯河原町在住）より、太田がのこした「太田宇之助文書」全八〇九件（当初は七九五件であったが、その後の整理過程で件数を改めた）の寄贈を受けた。受贈の経緯と同文書の概要については、本誌第二〇号（二〇〇二年）の拙文「解説」を参照されたい。

当館では、文書整理を進めながら、同文書中の主要文書である「太田宇之助日記」（以下、「太田日記」と略記）の内、昭和一五～二〇年分を翻刻し、本誌第二〇号～二八号（二〇〇二～一〇年）上で紹介した。太田が中国問題専門家として日中間で重要な役割を担った時期であったからである。翻刻の取り纏めと註記は、当初から「太

田宇之助文書」の整理を担ってくれた望月雅士氏（早稲田大学教育学部講師）に依頼した。また望月氏には本日記の詳細な解題として「支那派遣遺軍嘱託としての太田宇之助」の執筆を依頼し、本誌第二二号（二〇〇三年）に掲載した。

インタビューは、以上の戦時期の「太田日記」を補完する目的で、平成三〇（二〇一八）年一月二三日と翌三二（一九）年三月三日の二回、湯河原町の縫田曄子氏宅において、望月雅士氏と中武香奈美が行った。縫田氏は、久我山の太田家での日々の暮らしのなかで、中国人留学生をもてなす父、太田の姿に接し、また昭和一八～二〇年には日本語教師として上海に暮らして、当時の中国情勢や中国問題に取り組む太田（蘇州在）を近くに見ていたからである。インタビューからは、太田の対中国・中国人感のみならず、戦後、放送ジャーナリストとして活躍し、また女性の地位向上にも尽力していく縫田氏の戦時下での考えや活動、中国・中国人感などもうかがうことができた。

二回のインタビューの文字起こしと註記はおもに望月氏が行い、中武が補足した。縫田氏にはインタビューの文字起こし原稿をチェックしていただいた。また、望月氏にはインタビュー解説として「太田宇之助と中国人留学生」（後掲）の執筆も引き受けていただいた。おふたりに感謝申し上げます。

インタビュー記録の紹介に入る前に、太田宇之助父娘の略歴を記しておきたい。基本的には、本誌第二〇号の拙文「解説」からの再録である。

### 太田宇之助略歴

明治二四（一八九二）年一〇月、兵庫県揖保郡網干町（現姫路市）に生まれる

大正五（一九一六）年四月～五月、早稲田大学専門部政治経済科在学中（前年、二年次に編入学）、上海に渡って孫文の第三革命に参加

大正六（一九一七）年、早稲田大学専門部政治経済科卒業。大阪朝日新聞社入社。九月、北京通信部勤務

大正八（一九一九）年、上海特派員

大正一二（一九二三）年、東京朝日新聞社に転じる

大正一四（一九二五）年、北京特派員

昭和三（一九二八）年、東京本社勤務。七月～翌四年八月の約一年間、海外視察員として欧米各国へ出張

昭和四（一九二九）年九月、上海支局昇格とともに初代上海支局長。部下に尾崎秀美がいた

昭和七（一九三二）年、東京本社編集局勤務

昭和九（一九三四）年、社内到新設された東亜問題調査会中国主査

昭和一二（一九三六）年、論説委員兼任

昭和一五（一九四〇）年七月、支那派遣軍司令部嘱託（出向）

昭和一六（一九四一）年七月、支那派遣軍司令部嘱託を解任。

解任後は、朝日新聞中支特派員として中国にとどまる。また

東亜聯盟中国総会（総裁汪兆銘）顧問

昭和一八（一九四三）年、「南京国民政府」（汪兆銘政府）経済顧問

間・兼江蘇省政府経済顧問に招聘され、新聞社を退社

昭和二〇（一九四五）年三月、帰国（当初は一時帰国の予定）

昭和二三（一九四七）年四月、総選挙に出身地の兵庫第四区に

おいて日本社会党から立候補し、次点で落選。以後、中国問

題の評論家として著述業に専念

昭和五八（一九八三）年、杉並区久我山の自宅敷地を中国人留学

生宿舍（現東京都太田記念館）用地として東京都に寄付

昭和六一（一九八六）年九月、九五歳で死去

### 縫田嘩子略歴

大正一一（一九二二）年、中国上海に生まれる

昭和一二（一九三三）年、立教高等女学校（現立教女学院）卒業。

津田英学塾（現津田塾大学）入学

昭和一七（一九四二）年九月、津田英学塾を繰り上げ卒業。卒業

後、国際文化振興会に勤務



写真1 学生時代の太田宇之助  
「太田宇之助文書」より

昭和一八（一九四三）年、上海の女学校の日本語教師（一〇年）  
昭和二〇（一九四五）年三月、父と帰国。六月、NHK入局  
昭和二六（一九五二）年、米国オハイオ州立大学に留学（二七年）  
昭和三七（一九六二）年、NHKの女性初の解説委員  
昭和四六（一九七二）年、美濃部東京都政第二期の民生局長（一  
五〇年）  
昭和五〇（一九七五）年、NHK委嘱解説委員（一六三年）  
昭和五二（一九七七）年、国立婦人教育会館初代館長（一五七年）  
昭和六一（一九八六）年、（財）市川房枝記念会（現（公財）市  
川房枝記念会女性と政治センター）理事長（一平成五年）  
平成六（一九九四）年、総理府男女共同参画審議会会長（一〇九年）  
また、昭和から平成へ改元時の「元号に関する有識者懇談会」メ  
ンバーのひとり（唯一の女性）でもあった。

（中武香奈美）



写真3 太田宇之助 戦前  
「太田宇之助文書」より



写真2 大正11（1922）年、上海にて撮影（複写）  
前列中央が太田宇之助、2列目中央が孫文  
「太田宇之助文書」より

## インタビュー記録

\*インタビュー記録中には、今日では不適当と思われる表現があるが、当時の雰囲気や実態を示すため、あえてそのままとした。

### 縫田暉子氏インタビュー1

実施日：二〇一八年二月二三日

#### 1-1 国際文化振興会への就職

——『横浜開港資料館紀要』第二〇号から第二八号（二〇〇二～一〇年）（以下『紀要』と略記）にかけて、「太田宇之助日記」（昭和一五～二〇年）（一九四〇～四五年）（以下「太田日記」と略記）を翻刻しました。日記という性格上、どうしても事実関係や人間関係などの面で、よくわからないところが多々出てきます。今日、そうした疑問点を明らかにできるのは、縫田さんをおいて他にはいません。今日は、縫田さんの眼から見た、「父太田宇之助」についてお伺いしたいと思います。

まず、縫田さんは昭和一七（一九四二）年九月二五日に津田英学塾（現津田塾大学）をご卒業されますが、それに先立って、就職をめぐる記事が太田の日記に出てきます。六月一〇日付には、「ベビー（暉子）、国際文化振興会に就職の希望にはり切り履歴書を書く」（『紀要』二二、二二五頁）とあります。しかし七月一日付の日記には、「ベビー、栄子<sup>1</sup>より来信。国際文化振興会の就職の件につき秘書役

の口の相談を受け、反対を返事す」（『紀要』二二、二二五頁）とありますが、国際文化振興会<sup>2</sup>の就職にお父様は反対だったのですか。

縫田 いや、そうではないのです。津田塾は卒業すると、就職を心に誰もが就職しますが、私は呑気で、あまり就職を考えていませんでした。しかし戦争が始まっていますから、就職をしないといけないので、それを避けるには就職しなければならなかったのです。それで、なぜ国際文化振興会なのかあまり記憶がないのですが、朝日新聞で父が親しかった人に嘉治隆一<sup>3</sup>さんがいます。父は嘉治さんにいろいろお世話になったのですが、私の国際文化振興会への就職も嘉治さんのご尽力だったようです。私も国際文化振興会であれば、中国関係の仕事があるのではないかと思い、就職しました。国際文化振興会では、黒田清<sup>4</sup>専務理事の秘書というのが私の仕事でした。でも、私は秘書なんて嫌だと言ったのです。私も勝手なことを言いますね（笑）。それを父が嘉治さんに言ったのでしようね。そうしたら調査部へ入ることになりました。私と同期で入ったのが堀田善衛さんでした。他に石坂さんという方で、三人が同時に調査部に入ったのです。しかし何も仕事がないのです。五～六人のこじんまりとした部屋でしたが、資料がたくさんありましたので、本のカードを作りました。

調査部を仕切っていたのは伊集院清三<sup>5</sup>さんで、この方も華族でしたが、伊集院さんの原稿を清書したりすることなどもやっています。仕事といってもその程度でした。半年位勤めた後だったので、微妙が続いて少し休ませてもらって辞めましたので、本当に役立たずだったのです。



調査部には、村松嘉津さんという女性の方がいました。津田塾を出て、ソルボンヌ大学に留学したことのある方で、かなり年輩でしたが、フランス関係は彼女がやっていました。

調査部長もいましたが、外務省からの天下りでした。子供の菓を買いに行かせられたことがあって、この方を私は気に入らないのです(笑)。

堀田さんについても、私は気に入らない(笑)。堀田さんは私にいつもタバコを買いに行かせたのです。まだ有名ではありませんでしたが、雑談していると、なかなか面白いことを言う方でしたが、私が堀田さんを気に食わない理由には、こういうこともありましたが、

国際文化振興会を辞めて上海に行ったのですが、上海には国際文化振興会の支部ができて、そこへ堀田さんが来たのです。そうしたら、東京ではタバコを買いに行かせるやら、こき使っていた人が、上海に来たら私にお世辞を使うのです。上海には私の方が先に来ているし、親し



写真4 インタビュー中の縫田睦子氏 2019年3月30日

い人もいるからです。私は、この人はなんていう人だとずっと思っ  
ていましたよ。それきり会ったことはないのですが。これは余計な  
ことで、人に言うことではないですね。初めて言うことです。

## 1-2 中国へ—YWCAとブリッジマンスクール

**縫田 結局、国際文化振興会に勤めたのは、半年位ではないでしょ  
うか。秘書は嫌だ、入ったらくたびれる、菓やタバコを買いに行か  
せられて怒っている、なんて生意気だったことか(笑)。やはり  
仕事がつまらなかつたんですね。それで、何となく中国に関わる仕  
事がしたいという気はありましたし、中国へ行きたいと思っていま  
した。その頃、父が南京にいましたので、行きたいと言いましたら、  
父は反対しました。しかし母(栄子)が賛成してくれたのです。母  
が父を説得してくれたのです。この子が自分のしたいことを親の反  
対でできなくて、一生後悔するようではやりきれないと。本人が行  
きたいのであれば、行かせようと言ってくれたのです。そう  
したら、父も仕方ないと。**

父は日本YWCAと関係があったのですが、YWCAが上海に支  
社を置く際に、父にいろいろ相談したこともあったようです。それ  
で父が、娘が何もすることがないのに中国へ行きたがっていると  
言ったのです。そうしたら、YWCAの方が空き部屋がある  
から、ここへ来てもいいと言ってくれたのです。そのことがあって、  
父は私を行かせる決心がついたようです。

YWCAは上海の一番中心地にあつて、父の常住しているホテル  
から歩いて五分位の所にありました。私はYWCAに部屋を借りて、

ブラブラしていました。父は中国と日本を行ったり来たりしていたのですが、たまたま父が出張している時にYWCAの会長が上海に来て、私が何もしていないのを知り、上海のYWCAの内藤幸子<sup>6</sup>さんに、中国人の学校で日本語を教えるようにしてくれないかと言ってくれたのです。あの頃は日本が上海を占領中ですから、日本政府から上海の学校に派遣、派遣といっても強制的に日本語を教えていたわけです。その学校は共同租界から離れた中国人街にあり、男性の先生がいて日本語を教えていたのですが、よく休んでいたらいいのです。それで、私ではどうかという話になったのです。その代わり中国人街の学校だから、給料は中国人並みで、小遣い程度しか出せませんと、内藤さんに話があったようなのです。その話を聞いて、私はものすごく乗り気になったのです。そのような経緯で、勤めることになったのです。ブリッジマンズスクールという学校です。

—— YWCAの内藤幸子さんはどのような方でしょうか。

**縫田** 内藤さんは亡くなるまで、ずっと中国のYWCAです。YWCAには内藤さんと、補助をする長谷川道子さんがいました。この二人が職員でした。

ブリッジマンズスクールに勤めることになりました、最初に行った時に驚いたのは、生徒から宮城遙拝をしないのかと言われたのです。私がいきなり授業を始めたので、生徒がなんで日本に向かって宮城遙拝しないのかと。毎日、クラスごとに宮城遙拝をしてから授業を始めることになっていると言っています。学校の規則でそうなっているのか、クラスの先生によるものなのかは知りませんが、そう言われて本当にびっくりしました。

生徒は私になつてくれて、よく一緒に遊びに行ったりしました。話は飛びますが、終戦になる前、私が日本に帰るため、学校を辞めることになったのですが、出発の前日に、生徒たちが私の宿舎にお別れに来ると言ったのです。ちょうどその日は、たまたま上海でゼネストがあり、交通がストップしていたのですが、それでも生徒たちが十数名、バスでも四〇分位かかる距離を歩いて私の宿舎までお別れに来てくれたのです。それで、宿舎の窓から生徒の帰りを見ていると、道を突き当たって曲がると姿が見えなくなるのですが、曲がるとまた出てくるのです。それを何回も。一所懸命に手を振ってね。今思い出しても、涙が出ます。

—— 中学生ですか。

**縫田** 中学生と高校生、いや高校生だったですね。

少し話が飛びましたが、ブリッジマンズスクールへの就職は、父にも実家にも相談せずに独断で決めてしまいました。内藤さんの紹介ですし、きちんとした学校ですから、父も反対はしませんでした。内心ではホッとしたでしょうね。自分の所にまわりつかれても、困りますものね。ですから、父は上海に来るたびに内藤さんを食事(1)に招いたり、良くしていました。

—— ブリッジマンズスクールに通う生徒の親は、どのような階層の人たちだったのでしょうか。

**縫田** 割に裕福な階層でしょうね。先生方は私に敵愾心がありました。愛想はいいのですが。一人だけクリスチャンの先生とは仲良くしていました。アメリカ系のミッションスクールですから、それは敵愾心がありますよね。ですから、先生方とは馴染めませんでした。



意地悪されたり、不愉快な思いをすることはなかったのですが、親しくなることはありませんでした。

—— 先生方は中国人ですか。

縫田 全員中国人です。日本人は羽田さんと私だけ。

—— よく休む先生ですね。

縫田 そうです。羽田さんは、私は気に食わない。日本に帰って来て、調布か、あるいは府中だったかの教育委員をやっていました。私に会いたいと手紙が来ました。もちろん会いませんが、返事位は出したと思いますが。中国には、ああいう日本人がいっぱいいたのでしようね。

先生方の中には、アメリカの大学で学位を取った、女性の立派な数学の先生がいらっしやいました。終戦になったら教育団が来ますが、その先生はその中の中国代表のひとりに入っていました。私は懐かしいから、山王ホテルに会いに行きました。会いましたが、決してうれしそうな顔をしなかった。普通でしたら、戦争が済んで、久しぶりに会ったのだから懐かしい思いがするでしょう。ところがそうではなかった、挨拶をしただけでしたね。

—— 戦後、内藤幸子さんとはお会いになりましたか。

縫田 会っています。日本YWCAが市ヶ谷にありまして、今でもありますが、内藤さんと長谷川さんはその職員でした。内藤さんは京都出身で、同志社を出られた方でした。NHK時代、講演で京都に行った時は会いましたし、亡くなられた時は京都へお葬式にも行きました。内藤さんも長谷川さんも、敗戦後、どの位中国で足止めを食っていたことか。

—— 「太田日記」昭和一八（一九四三）年二月二六日付に、「ペビーより珍しく手紙あり。初めての真面目なる手紙。読み行く中に支那に対する真剣なる気持に打たれて涙ぐましくなる。何とかしてその志の一部を遂げさせたい心地す」（『紀要』一三三、一八〇頁）とあります。

縫田 そうですか。中国行きは、母が説得したとばかり思っていますが、それでしたら父にお礼を言わないと（笑）。

—— 「太田日記」三月一〇日付に、「YWCAの内藤幸子氏朝食に招きて運動の内容を聞き、ペビーの仕事の問題に就き意見を聞く」（『紀要』一三三、一八四頁）とありますので、お父様と内藤さんの間で、いろいろと話が進んでいたのかもしれないですね。ご本人が知らないところで。

縫田 そうですか。思い直さなくては（笑）。

### 1-3 中国人留学生と太田家

—— 前述の「太田日記」昭和一八（一九四三）年二月二六日付に「支那に対する真剣なる気持に打たれて涙ぐましくなる」とありますが、この頃、縫田さんは中国問題についてどのようにお考えだったのでしょうか。

縫田 実家には、中国の留学生がいつも来ていて、家族同然の関係でした。早稲田の留学生が一番多かったですね。あと一高。うちは本当にザックバランで、母がご飯食べて行かないかと、留学生に言うのです。あなたが来るから、私たちが食べる分が減るけどねって、必ず付け加えるのですが（笑）。そう言えるほどの関係でした。

—— 中国の留学生と、戦争の話はしないのですか。

**縫田** しませんね。皆、食べに来るのです。私が今でも忘れられないのは、一高から東北帝国大学へ行った留學生がいたのですが、仙台に行ったら結核になってしまったのです。東京に来ると、必ずうちに来るのです。これはあとで母から聞いたのですが、あの頃は病人ですと、配給がいいらしいのです。その留學生は自分で砂糖などを使わないで、うちに持ってくるのです。人に言うことではないですが、心を動かされました。

もうひとつ、この話は父が涙していましたが、学費が届かなくなった留學生がいます。父がそれを出してあげたことがあったのです。戦後、その留學生が蔣介石政権の教育関係の要職に就いて、来日した際に実家に来たそうです。そして学費を返したというのです。その時、さすがに父は泣いたそうです。うちは本当に中国人と親しかったのです。

—— 中国人の留學生がお宅に来るようになったのは、いつ頃からですか。

**縫田** 私が女学校の頃には、もう来ていましたね。上海から帰って来たのが小学校の五年か六年ですが、その頃はまた借家ですからあまり来ていませんが、久我山に移ってからは留學生が来るようになりました。うちはお金がありませんが、父は留學生のためには使っていましたね。留學生も居心地よくしていました。でも一人自殺した留學生もいました。

—— どういう経緯で留學生が来るようになったのでしょうか。

**縫田** どういうきっかけでしょうかね。一番中心になっていた早稲田の留學生が、次々に留學生を連れてくるようになりました。いつ

からどういう経緯かは、私にはわかりません。でも久我山に来る前は吉祥寺で家を借りていましたが、そこに中国人の留學生が来た記憶はないですね。その頃、日本人の家に来てご飯を食べるといのは、あまりないでしょう。あなたたちが来たから私たちの分がなくなつてと言いながら食べさせて(笑)。留學生も庭で池を見たり、好きにしていましたね。

私は自分を日(日本)と華(中国)の子と思っているのです。父の望み通りのことをやったかしらと、この頃よく思うのです。父は中国人を大事にしていましたから。でも戦争の時代ですから、学校に行く、私の家に中国人が来ていることについて、何か言う人はいませんでしたね。怖くないの、と言われたこともあります。

それと父は中国のジャーナリストとも関係があるでしょう、その関係で来る人もいましたね。島田大輔さんの論文を読んで、父が中国人から評価されていたことも知りました。

留學生たちは井の頭線の最終電車までいることもあって、駅まで歩いて七、八分ですが、終電車の時間になると慌てて帰るのです。もし乗り遅れたら、戻って来なさいね、と言って。電車が来て誰も戻ってこない、間に合ったねと言って寝るのです(笑)。そういう家でした。

—— 留學生との会話は日本語ですか。

**縫田** 全部日本語です。父は中国語ができないのです。島田さんから、中国語ができないのに、どうしてこういう仕事ができるのかと聞かれましたが、私にはわかりません。聞くことはできるけれど、話すことができないようです。

—— 縫田さんはどうですか。

**縫田** 北京語は習ったけれど、上海にいたでしょう、そうすると言葉が違うのです。今でも私はテレビで中国語の講座を見えますけれど、一年経つとまた初歩からなのです（笑）。ブリッジマンスクールでも、日本語を教えていましたが、困った時は英語です。生徒は英語がよくできましたから。

#### 1-4 厳一家との関係

—— 「太田日記」昭和一八（一九四三）年七月一四日付に、「ベビーの初めて見る蘇州はきたない、異様な町に過ぎなかった。しかし鶴園の住居と云ひ強い印象を受けたやうだった」（『紀要』二四、七八頁）と書かれています。

**縫田** 私は上海しか知らないのです。蘇州は田舎町ですからね。蘇州には、日記によく出てくる厳慶祥さんがいまして、織物の会社だったかをやっている、豪商というか、蘇州の主のような感じでした。蘇州では、厳さんと日本軍が密接な関係にあつて、蘇綸紡という会社でしたが、父が日本から来るというので世話をしてくれました。厳さんの息子の厳道君が京都帝国大学に留学していましたが、東京によく来ていて、うちでよく世話をしていました。日本には物資がない頃でしたが、中国からいろいろなものを持って来てくれるのです。厳道君はとても正義感の強い人で、京都で特高警察だったかに家を調べられたのが不愉快で、帰国しました。

厳さんの家は蘇州の他に上海にもあつて、私はよく食事に招かれました。戦後、日本に協力したというので、厳さんは上海の一等地

にあつた家を接収されて、門番のいた部屋に住まわせることになったのです。後に家は返してもらったそうですが、その後、娘さんがアメリカに行くというので、東京に立ち寄った厳さんと会ったことがあります。

厳道君は私が上海にいた時に帰って来て、親に内緒で重慶に行つたのです。その前の日に私の所へ来たのですが、翌日いなくなつてしまいました。対日戦に参加したようです。

戦後、厳道さんとはクリスマスカードを交していました。いつからかそれもなくなりました。年齢は私と同じ位だったでしょうか。

—— 厳道さんは、抗日的な思想が強かったのでしょうか。

**縫田** いや、そうではなかったでしょうね。特高警察だったかに調べられて、傷ついたのではないのでしょうか。それまで家に来て、元気にしていましたから。あの頃は外国人の学生というところ危険視されていたでしょう。家にも外国人の学生について警察が調べに来ていたようです。

—— 当時、日本は中国と戦争をしているわけですが、縫田さんは中国との関係をどのようになしたいとお考えだったのでしょか。

**縫田** 私は中国にも、アメリカにも敵愾心がありませんでした。私に通っていた立教女学院<sup>9</sup>はアメリカ系でしょう。私が生涯を通じて運がよかつたと思うのは、家庭教育がよかつたことと、立教女学院の教育を受けられたことにあると思っています。立教女学院は民主主義教育なのです。私の当時の日記には、日本だけでなく、アメリカも負けるなど書いてありますから（笑）。

—— 縫田さんが書かれた日記ですか。

縫田 私の日記です。七〇年書きました。ここへ来て、全部捨てたのです。小学校へ入った時から、ずっと日記をつけていました。重要なところだけを書き写したメモだけは残しましたが。母が私の生まれた時から日記をつけてくれていて、小学校の頃から日記をつけるようになりました。

## 1-5 太田宇之助と政治

—— お父様が南京国民政府顧問に就任するにあたり、朝日新聞社を退職されますが、ジャーナリストから政治の世界へ進まれることに、当時のようにお考えでしたでしょうか。

縫田 汪兆銘政権に協力することに父には抵抗がないのかと、私は長い間思っていました。島田さんの論文を読んで初めてわかりました。それは重慶と南京を一緒にさせようとの思いで活動していたということ。私はかつて、父が南京に行ったことについて、何か考えがあるのだろうと書いたことがあります。自分の生涯の目的のためには、

これだということを選択をしたのだと考えています。島田さんの論文でわかったことは、重慶と南京とを対等の



写真5 汪兆銘の肖像写真  
太田へ献呈（台紙に汪の署名あり）  
「太田宇之助文書」より

関係にすることを父が目指していたということです。父のバックには重光葵<sup>⑩</sup>や辻政信<sup>⑪</sup>がいて、決して時流に乗ったのではないということです。父なりに理想的な考えがあつて、やっていったことだつたと思つています。

それと戦後、総選挙に立候補した時は、家中で反対しました。私は一度も応援に行きませんでした、反対だけして。縫田（清二）<sup>⑫</sup>とはまだ結婚していなかった時でしたが、縫田が気の毒があつて応援に行つてくれたのです。母は仕方がないので応援に行きましたが、嫌があつていました。あの時も父の考えがあつたのですが、私はよく落ちてくれたと思つているのです（笑）。次点で僅差での負けでしたから、親戚にも恥をかかせずに済んだとは思つています。

島田さんの論文でわかつたことのもうひとつは、戦後に『中華日報』が潰れて『内外タイムス』<sup>⑬</sup>になるのですが、なぜ父は『内外タイムス』<sup>⑭</sup>なんかいつまでもやるのか、気に食わなかつたのですが、選挙のために中国からお金を借りていたので。その返済のためなのです。いくら暇だからといって、毎日毎日『内外タイムス』へ行かなくてもいいのと思つていましたが、お金が関係していたのです。これは島田さんの論文を読んで初めて知つたことです。

実家は割に立派な家だつたのです、広くて。だから皆、金持ちと思つていらっしゃるのですが、カネはないのです。いろいろな人のために使つていましたから。

—— 久我山の立派なお宅は、買われた頃は土地が安かつたということですか。

縫田 買った当時は、土地は二束三文ですよ。買った頃は、まだ井



の頭線が通っていませんでしたから。当時は一面の畑です。ですが、井の頭線が吉祥寺まで行くことを、父は確かめていたのでしょうか。

—— 縫田さんは当時、汪兆銘政権を日本の傀儡と見ていたのでしょうか。

**縫田** 父は「満州国」ができた時に、猛烈に反対しました。「満州国」ができてから、一度も満州へ行きませんでしたし、一度もそれについて発言したことはないはずです。そういう父を知っていますから、汪兆銘への協力はそれと同じようなことだと、私は当時見ていました。だから、なぜ協力するのだろうとは思っていませんでした。

—— 重慶政権については、やはり敵という感じでしたか。

**縫田** 敵国ですね。だけど、昔から親しい人たちは皆、重慶の国民政府ですからね。戦後、台湾で要職に就いた元留学生が、蒋介石の亡くなった後だったと思いますが、父を台湾に招いてくれたでしょう。父は感激していました。

—— たと思思想・信条が変わったとしても、人としての信用や信頼という点でつながっているということではないでしょうか。

**縫田** そうだと思います。だから私は今でも中国人が好きなので。信頼できるし、義理堅いしね。ですから、人間関係を大切にすることは、体制や情勢が変化しても変わらないのではないのでしょうか。留学生はほとんど台湾に行きましたね。もともとの後は、アメリカに行ったり、バラバラになりましたが。

## 1-6 上海事情

—— お父様は蘇州時代、アヘンの問題や物価高の問題について意

見書を書かれています。上海でも同じようなことがあったのでしょうか。

**縫田** その点についてはわかりませんが、上海の物価は高かったですね。それで給料は中国人並みですから、辛いわけですよ。日本人であれば三倍か四倍になるでしょう。だから長谷川道子さんとマーケットに買い物に行つても、粗飯でしたね(笑)。お金はなかったです。

—— 上海では、抗日の動きとかあったのでしょうか。

**縫田** あまり私は感じなかったですね。学校と家を行ったり来たりしただけでしたから。私は一般の中国人との付き合いはありませんでした。YWCAの内藤先生は居留民の関係で中国人との付き合いがありました。内藤先生の場合は、中国人と日本人の関係をよくするのが仕事でしたから。私にはそういう関係はありませんでした。ですから、YWCAの役には立たなかったですね。

## 1-7 処女作をめぐって

—— 『大陸新報』に「現地婦人と日本語教授」という論文をお書きになっていますが、日本語でお書きになったのですか。

**縫田** 日本語です。『大陸新報』は居留民のための新聞です。—— お父様はさういふん、褒めていらつしやいます。

**縫田** 親馬鹿ですね(笑)。『婦人大陸』というのも、居留民の女性のために発行されていました。女性向けでは、唯一の日本語の雑誌です。その編集長が春野鶴子<sup>16</sup>さんです。春野さんが戦後、主婦連<sup>17</sup>で奥むお<sup>18</sup>さんの広報の係をしていました。春野さんから頼まれて、『婦人大陸』にも何回か書きました。戦後、取材で主婦連に行つた

ら、春野さんがいるのでびつくりして。春野さんはおしゃもじなんとか（しゃもじをシンボルにした消費者運動）で、よく活躍していましたね。政府に陳情したり、なかなか男勝りの方で。

占領中の上海では、日本人は公園に入れますが、中国人は入れないのです。日本軍が管理していますから。私は日本人だから、許可証を持っているので入れるのですが、子供たちだけでは入れないのです。ですから、子供たちを公園に連れて行くと、とても喜びました。

—— 戦後、教え子の方との関係は。

**縫田** 高校で割と積極的だった女の子がいたのですが、その子と銀座でばったり会ったことがあるのです。突然「先生！」と呼ばれて。抱きついて来て。今、どうしているのか聞いたら、結婚して、商売で横浜に住んでいると言っていました。日本に来てすぐに、私を探しにYWCAに行ったらいいのです。ところが私は縫田に変わっていいでしょう、だからわからなかつたらいいのです。横浜の家に伺って、ご馳走になったこともあります。

日本が戦争に負けて、しばらくの間は文通もできなかつたですから、子供たちとの関係もなくなりました。YWCAにいれば、関係が続いていたかもしれません。

—— 『大陸新報』に処女作「現地婦人と日本語教授」という論文をお書きになられたことを伺いましたが、それはどのような内容でしょうか。

**縫田** それは『情報との出会い』<sup>19</sup>に入っています。これは自慢話になるのですが、上海の日本公館は総領事館になるのです、大使館ではなくて。これは人から聞いたのですが、総領事館の誰かが私のこ

とを、あの人は自分たちの仕事よりも余程いい仕事をしていると褒めてくれたらしいのです。役人にはできませんよね（笑）。結局、私は父の関係で得をしていますよ。皆、苦労しているのにね。危なくなれば、さっさと帰国しましたしね。役得をずいぶんやってます（笑）。

#### 1—8 塙光太郎のこと

—— 当時、上海は日本軍が抑えている感じでしょうか。

**縫田** そうです。当時、上海のバンド、日本という銀座のような所に住んでいましたが、上海はイギリスが強かったのでしょうかね。イギリスの役所のアッタ所<sup>20</sup>に日本の海軍が駐留していました。

私は愛国少女なのです。毎月小遣いの中から、飛行機のために寄付していました、わずかですが（笑）。日本にいたボーイフレンドが飛行機に乗っていましたから。亡くなりましたけれど、太平洋で。

—— 塙さんですか。

**縫田** 塙さん、父の日記に出てきましたか。海軍航空隊でした。パオで戦死しました。私のボーイフレンドは何人かいますが、皆、上海の小学校の出身です。上海の小学校の卒業生は人数が少ないのですが、仲がいいのです。三人と仲が良かったのですが、一番仲が良かったのが塙さんでした。三人とも戦死しました。塙さんは飛行機だから、まだ辛くないのですが、ひとり陸軍で、もうひとり戦病死でした。餓死ではないでしょうか。皆、仲が良かったのですよ。中でも塙さんとは家も近かつたし、井の頭線でね。慶應義塾に通っていました。



塙さんはよく早慶戦の切符をとってくれました。塙さんから切符をもらって、早稲田を応援するのです(笑)。塙さんも家によく来て、ご飯を食べていきました。塙さんの一家がまだ上海にいましたから、立派な家が駒場にあったのですが、親は上海にいましたので、私の家によく来たのです。母をママ、ママと言って(笑)。ですから、母もとてもかわいがっていました。

—— 塙さんのお名前は何とおっしゃるのですか。

**縫田** 塙光太郎(はなわこうたろう<sup>20</sup>)と言います。年齢は私よりも二歳位上だったかしら。仲の良かった他の二人は早稲田でした。

—— 将来は、塙さんと一緒にいるとお考えだったのでしょいか。

**縫田** いえ、まだ子供でしたから(笑)。遊び友達です。一緒に音楽会を聞きに行ったりしました。私は、お兄ちゃん、お兄ちゃんと呼んでいました。

これは話が違いますが、私は幽霊を見たことがあるのです。ちょうど、クリスマス休みで蘇州に行っていた時です。夜、寝ていましたら、胸が苦しくなったのです。眼を開けたら、前に白い人のようなものが見えたのです。びっくりしてね、布団を被ったのです。翌日起きて、あれは何だったのだろうと、あれを幽霊というのかなと思って、きっと母方の祖母が亡くなったのかなと思いました。クリスマスイブの日でした。塙さんの戦死公報が届いたのは翌年の二月か三月でしたが、戦死の日がクリスマスイブだったのです。戦死の日にちを見て、びっくりしました。

—— お別れに来たのですね。塙さんのことはお尋ねにくいことで、どうしようかと迷っていました。

**縫田** 塙さんのお父さんは三井物産の上海支店長でした。駒場の民芸館の向かいの、とても立派なお宅でした。私はよく遊びに行きました。女中さんが二人いましたが、塙さんはひとりで住んでいました。その頃、私は結婚なんか考えていなくて、喜んで遊んでいました。ハワイアンのコンサートに連れて行ってくれたりね。塙さんはよくお酒を飲んでいましたね。

## 1-9 尾崎秀実のこと

—— 蘇州でのお父様についてですが、「太田日記」昭和一九(一九四四)年一月一日付に、この日は縫田さんのお誕生日ですが、次のようにあります。厳君らとスキヤキ中に、隣組の伊藤君(連絡部の情報主任)が酔いつぶれて乗り込んでくる。近所に引越しても一度も挨拶なく、早稲田の同窓でありながら、何の交際もせず、「自ら高く超然として居るのが気に食はぬと云ふにあるらしい」(『紀要』二五、一一八頁)。蘇州公館でのお父様は孤立しているような状況だったのでしょいか。

**縫田** 父はお世辞の外交をする人ではなかったですから。父はお酒を飲まないのです、酒とタバコは生涯やらないと決めたのだそうです。酒を飲まないから、自分には友達がいないとも言っていました。父は自分の友達の範囲が少なかったから、酒を飲んで交友を広げるのもいいと言っていました。父にとつての友達は留学生だったのですね(笑)。

父は女性には親切で、尾崎秀実<sup>21</sup>さんの未亡人とか、徳富蘆花<sup>22</sup>の未亡人とかね。徳富さんの奥さんはひとりでいましたが、よく朝ご飯

を食べに来ていましたよ。家や土地を東京市に寄付するとかで、自分の住む所を久我山のひとつ先に買ってね。その際に、父がずいぶん世話をしました。建築屋さんを紹介したりね。

尾崎秀実さんの奥さんについても、よく世話をしていました。尾崎さんの『愛情はふる星のごとく』<sup>(23)</sup>を読むと、何かあると久我山へ行くと書いてありますね。兄が結婚する時に、何かお祝いを、とも書いてあります。

ですから、父の資料の寄贈先についても、もとをただせば、尾崎さんなのです。尾崎さんの娘さんのご主人が今井清一先生<sup>(24)</sup>で、その関係で横浜開港資料館へ寄贈したわけです。

尾崎さんの娘さんは東京女子大学へ入りました。あまり勉強しない子で(笑)。お母さんから勉強を見てほしいと頼まれて、ひと月に一回ほど、勉強を教わりに来ていました。でも、いつも二人で遊んでしま



写真6 (太田) 暉子と尾崎秀実 昭和11(1936)年7月12日、久我山の太田邸の庭で 縫田暉子氏提供

うのです(笑)。小遣い銭位はもらっていたと思いますが。年に二回位、親戚を招待するのですが、その時に尾崎さんの奥さんも呼んでいました。

—— かわいそうだから助けてあげよう。

縫田 いや、かわいそうだからというのではなくて、父は尾崎さん一番かわいがっていましたから。尾崎君、尾崎君と言っていましたね。

私と尾崎さんが一緒に写っている写真があるのですよ。家の庭で、二人で寝転がっている写真です。尾崎さんは私の顔を見ると、色黒いが南洋じゃ美人っていう歌を歌うのです。私のラバさん、酋長の娘…と歌うのです(笑)。そういうふうに尾崎さんとは親しかったのです。尾崎さんの奥さんはきちんとした方でした。だから辛かったですよね。

#### 1-10 「太田宇之助文書」寄贈の経緯

縫田 父の資料をどうしようかという時に、特に親しかったわけではないのですが、今井先生が頭に浮かんだのです。学者ということと、夫の縫田と飲み友達というほどではないのですが、知っていましたから。今井先生は清一で、うちは清二でしょう(笑)。今井さんのことは頭にあつて、新聞の神奈川版を見ていると、時々今井先生が出てくるでしょう。でも、厚かましいですよ。太田記念館<sup>(25)</sup>まで呼び出して、資料を見てもらって。そうしたら、今井先生が自分分は専門ではないからと、白井勝美先生<sup>(26)</sup>を連れて来られたのです。白井先生は、この資料は置いておいた方がいいとおっしゃられました。

—— 白井先生も関わっていらつしやったのですね。

**縫田** 今井先生が、中国のことは私にはわからないと。友人を連れ  
てくると言って、一週間後位にまたいらつしやったのです。白井先  
生は大事にしなさいと言ってくれました。

太田記念館は東京都に寄付したわけですが、資料については横浜  
開港資料館に寄付していいですかと、太田記念館に電話で聞いたこ  
とがあるのです。そうしたら二つ返事で、どうぞということでした。  
だいぶ経つてから、都庁の友達に金平輝子<sup>27</sup>という人がいるのですが、  
女性で初めて副知事をした方です。金平さんは、私が局長だった時  
の課長でした。副知事でしたから、太田記念館のこともよく知って  
いるわけなのですが、父の資料が横浜に寄贈されたことを知って、  
ものすごく怒つたらしいのです。東京都にも資料館はあると。

—— 東京都公文書館でしょうか。

**縫田** 東京にも資料館があるのに何だと。ものすごく怒つたそうで  
す。後の祭りですが（笑）。

—— 申し訳ありません（笑）。

## 1—11 太田記念館の設立経緯

**縫田** いえ、よくやつてくださったと感謝しています。

太田記念館は石原慎太郎都知事になってから、ダメになったので  
す。都立大学の寮にするとかの話もあって。金平さんは太田記念館  
のことを、ずっと気にかけてくれていました。彼女とは今でも付き  
合いがあって、今朝も電話をくれました。

東京都は太田記念館を粗末にしていると、金平さんは口癖のよう

に言っていました。お世辞で言ってくれているのかと思っていまし  
たが、都知事が舩添さんになると、金平さんはその局長に親しい人  
がいるらしくて、手紙を書いたのだそうです。東京都は太田記念館  
を大事にしないかと。ちゃんと知事に伝えよと。

舩添さんはソルボンヌ大学で、孫文の研究をしたと書いてあるの  
を私も何かで読んで、この人には太田記念館のことを知ってほしい  
と思っていました。金平さんが局長を通じて知事に言ってくれたこ  
ともあって、太田記念館二五周年記念を開催していただきました。

二五周年記念は新聞にもずいぶん載りました。東京都の職員が自  
動車で迎えに来てくれて、私も出席しました。どうしても出て欲し  
いと。太田記念館に中国大使を呼んで、舩添さんも来ました。夜は  
新宿で大きなパーティをやりまして、百人位呼んだのかな。

父は生前、自分の財産は中国のために使いたい、中国人の学生の  
寮をつくりたいと言っていました。父は中国大使館とかいろいろな  
所へ寄付願いで行ったらしいのですが、お金がかかることですから、  
もううことはできるけれども、運営はできないと言われて、頓挫し  
ていたのです。

太田記念館の寄付については、次のような事情があります。私が  
国立婦人教育会館にいた時、埼玉県副知事に松永緑郎<sup>28</sup>さんがいらつ  
しゃって、会館をとんでも大事にしてくれました。私が館長を辞める  
時に、松永さんが送別会をしたいと鰻屋さんに呼んでくれたのです。  
私は鰻が好きではないのですが（笑）。

松永さんはその前の日だったかに、埼玉の姉妹都市の関係で中国  
へ行かれて帰国したばかりだったのですが、熱烈歓迎されたいらしい

のです。私の送別会なのに、婦人教育会館ではなくて、中国の話ばかりするのです。それで私から中国との関係の話をしたら、松永さんは初めて聞くわけですよ。父が寄付をしたいのだけでも、運営費の関係でどこも実現しないことを話したら、松永さんは、それが埼玉にあつたら、喉から手が出るほど欲しいと言ったのです。それを聞いて、公の自治体が引き受けることはあり得ると思つたのです。それで金平さんの所に行つたのです。

当時、都知事は鈴木俊一さんで金平さんは局長でしたが、鈴木さんの特別秘書に事情を話してくれたのです。その方は私もよく知つていた方でしたが、彼が言うには、鈴木知事は変わったことが好きだから、面白いから話してみると言つてくれたのです。ちょうどその時は、東京と北京の友好都市一〇周年だったのです。鈴木知事は一〇周年を記念して寄付を引受けると発表したのです。それで太田記念館ができたのです。だから私が鰻を食べなければ(笑)、松永さんに会わなければ、寄付の話は自然に消えていたでしょうね。

父は桜美林大学の創設者と親しかつたのですが、そこへも寄付願いに行きましたが、もらうのはありがたいが、運営はできないと言われて。いろいろな所へ父は行つていて、私はそれを聞いていますが、サポートするつもりはなかつたですから、唯聞くだけでした。その話は無理だと、もらつても仕方がないと思つていましたから。

## 縫田暉子氏インタビュー2

実施日：二〇一九年三月三〇日

### 2-1 太田宇之助の遺品

**縫田** 父はいろいろな全集を持っていました。あれだけ仕事をした人ですから、専門の本もあつたと思いますが、遺品の中になかつたということとは始末したのでしょうか。

—— 主なご遺品については、公的な機関が所蔵することになつてよかつたと思います。

**縫田** ほんとうにそうです。父は亡くなる年、昭和六一(一九八六)年の五月三十一日に倒れました。病気ではないのです、三十一日に母と散歩して転んだのです。父は毎日近所を散歩していたのですが、ひと休みして立ち上がろうとした時に立ち上がれなくて転んだのです。救急車を呼んで病院に入つたのですが、腰の骨を折つていました。年齢も年齢でしたので手術はしないで、そのまま病院生活が続いて九月二日に亡くなりました。

—— ご遺品の中に、徳富蘆花の兵児帯もあつたようですが。

**縫田** 蘆花の兵児帯は父が亡くなつた後、夫が使つていました。蘆花の奥さんが父に下さつたものでした。大きくて、柔らかくて、とても上等なものでした。

—— 蘆花の水彩画もあつたのでしょうか。

**縫田** 蘆花の画いたものだったか記憶がないのですが、向井潤吉の水彩画はありました。

—— それは今、太田記念館にあるのでしょうか。



**縫田** それはいいですね。太田記念館には、今はそういうものは何もありません。

## 2-2 国際文化振興会について

—— 前回、国際文化振興会について伺いましたが、堀田善衛の『めぐりあいし人びと』（集英社、一九九三年）を読んでみますと、「なんと也得体の知れない団体で、一種の知識人の吹き溜まりといった感じ」で、伊集院清三を仲介に文芸評論家の小林秀雄に知り合ったりとか、後には同じく文芸評論家で吉田茂の長男の吉田健一が入ってきたりしたそうです。

縫田さんも国際文化振興会に、そういう感じをお持ちでしたか。

**縫田** 私は最初、専務理事の秘書でしたが、秘書は嫌だと言ったら、調査部へ行ったのですが、調査部は図書室のような静かなところでした。伊集院さんはそこにいらっしゃいました。伊集院さんは小林秀雄さんと親しくて、小林さんの書いた『モーツァルト』は、自分が書いたとおっしゃっていました。伊集院さんがおっしゃることだから、確かなことはわかりませんよ。全部書いたのか、部分的に書いたのか。伊集院さんは調査部で、いつも原稿を書いています。私は伊集院さんの走り書きの原稿の清書をしていました。伊集院さんは独特の字で、読める人があまりいないのですね（笑）。私はたまたま読めたものだから、それで気に入られて、伊集院さんの仕事をよくしていました。

伊集院さんは久我山の実家に来てくださったこともありましたが、私が上海に行く時、東京駅まで送ってくださった、親類以外のただ

一人の方でした。伊集院さんは華族の出身で、音楽家でもあって、ピアノをお弾きになりました。

—— 調査部にはいろいろな方が出入りしていたのでしょうか。

**縫田** 伊集院さんにはお客さんが多かったですね。伊集院さんの他には堀田さんが職員でした。

あと村松嘉津さんという方で、この方は津田塾の卒業生なのですが、フランスで勉強なさって、フランス関係のことは村松さんが担当していました。年齢は私よりもかなり上でしたが。調査部では、伊集院さんと村松さんが仕事をよくしていらっしゃったという印象ですね。

—— 村松嘉津さんについて調べました。津田の卒業は一九二六（昭和元）年で、一九八九年に亡くられています。村松ガスパルドン嘉津さんです。私（中武）が横浜開港資料館に入りたての頃、自身は直接お会いすることはなかったのですが、展示で村松さんから資料をお借りしました。明治期に制作された日本を題材とした絵柄のお皿で、村松さんは長くフランスにいらっしゃったと伺いました。津田の卒業生名簿にお名前が出てきます。

**縫田** 調査部は五、六人しかいなかったのですが、私が見る限りでは、伊集院さんと村松さんは活発でした。堀田さんは何をしていたのか、だいぶ伊集院さんに近づいていましたね。

—— 村松さんとは、それ以後は。

**縫田** 以後はないです。その時も、私は子ども扱いでした（笑）。

部長が外務省の稲垣さんで、調査部は小さな部屋が二部屋でしたが、伊集院さん、村松さん、石坂さん、堀田さんがいらして、もうひと

つの小さな部屋に、アルバイトのお茶汲みの男の子と私がいて、雑用をしていました。

—— 調査部はそれぞれにテーマをもって、調べるといことでしょうか。命令で調べるのですか、それとも自発的にですか。

**縫田** それは私にはわかりません。何しろ、調査部に入って味噌づかすで、本のカード作りをしていましたから。仕事がないから、そうして下さったのでしようが（笑）。私が退職した後に来られたのは金子さんという男性の方ですが、終戦後、占領軍の関係で活躍されて、NHKに入入りされていました。その方の妹だった方と、NHKで親しくしていました。

—— GHQのCIE（連合国総司令部の民間情報教育局）ですか。

**縫田** CIEです。CIEのオフィスがNHKに入りましたから。先程の質問ですが、調査部は活発ではなかったという印象です。私もお恵みで雇われているようなもので（笑）。

伊集院さんは私に上海に行っても、久我山に尋ねに来てくださいました。でも日本へ帰ってきてから、一度お宅にお尋ねしたのですが、玄関先で失礼しました。それ以来お付き合いはしませんでした。とてもお世話になった方ではありませんが。

## 2-3 徴用について

—— 前回のお話のなかで確認させていただきたいのですが、津田を卒業して就職しないと徴用されるというのですが、たとえば家事手伝いとか、花嫁修業などをしていると、徴用の対象になったというのでしょうか。

**縫田** 私が卒業してすぐはそうでもなかったのですが。就職については、大学が世話をしていましたが、私はそのお願に行きませんでした。父がその方はやるから、申し込まなくてもいいということでしたので。その頃は津田の就職は先生が多かったですね。でも私の成績では、先生になれない（笑）。

上海から帰ってきた頃は、徴用を周りが心配しましたね。ブラブラしていると徴用になるから、どこかに勤めた方がいいよとは言われました。当時は徴用ということが、かなり切迫した感じでありました。津田を卒業した頃とはだいぶ違っていました。

—— やはり徴用は嫌なものですか。

**縫田** 嫌というより、どういうところへ行かされるかわからないですからね。だいたい工場ですが。

## 2-4 晩年の太田守之助の願い

—— 久我山のご実家が東京都へ寄贈されるにあたって、お父様は大変にご苦労されたということですが、今でしたら、中国からの留学生も多いですから、歓迎されるのではないかと思うのですが、当時はかなり珍しい話だったのででしょうか。

**縫田** 少し前のことからお話したいのですが、戦後、久我山の実はGHQに接收されそうになったのです。昭和二二（一九四六）年三月のことです。その頃は、留学生はほとんどいませんでしたが、残ったわずかの学生が司令部に陳情に行つたのです。「中国人学生の家」だったか、看板を作っていましたね。戦後はわずかな留学生が残っただけでした。戦前は留学生の会を年に二、三回、六、七人を



呼んでパーティーをやっていました。戦後はほとんどないですね。

—— 戦後、継続されなくなったというのは。

**縫田** 留学生がいなくなったからです。

—— お父様が久我山のお宅を寄贈したいというのは、いつ頃からなのでしょうか。

**縫田** 父が寄贈したいと言いだしたのは、突然でした。父から聞いて、私が動き出したのが昭和五七（一九八二）年ですから、その前ですね。

私は夢みたいな話をしていると感じました。父がいろいろな所へ行っているとは、何となく聞いていました。桜美林大学の創設者の清水安三<sup>(28)</sup>さんと親しかったので話に行ったりしていました。皆さん、いい話だとは言ってくれますけれども、寄贈されても、誰が運営するのかということなのです。父からそういう話を聞いていましたけれども、私は別に手伝おうとは思わなかつたです。どういうことをするのもよくわかりませんでしたから。

—— 寄贈は亡くなった後に行うということですか。

**縫田** 生前に寄贈です。父のその寄贈の話は無理と思いました。私も仕事がなくなりましたら、久我山に留学生用のマンションを建てようと考えてみたりしたこともありましたが。暇になったら、中国人留学生のために何かやろうと話題にはしていましたが、あてもないです。そういう時に、埼玉県の副知事に出会った話は前回しましたね。そこで初めて私が動いたのですが、昭和五七年のことです。ですから埼玉県の副知事との出会いは瓢箪から駒で、それがなかったら、私は動くつもりはありませんでした。都庁へ行ったのは翌

五八年です。

その寄贈の話の前に、父にとつては『生涯』<sup>(30)</sup>の出版がとても大きなことでした。この出版に関しては、兄に感謝しています。昭和五六（一九八一）年のことです。これについては、父は前から出版したいという希望を持っていましたが、引き受けてくれる出版社が見つかりませんでした。

出版記念会はとてもいい会が催せて、その時は出版社が主賓で、緒方貞子<sup>(31)</sup>さんも来てくださり、晩年の父が一番楽しかった日ではないでしょうか。兄と私が主催して二人お呼びしました。

—— 今や、『生涯』はなかなか手に入らない稀覯本です。

**縫田** そうですか。父の一番したいことができたわけで、これは兄のおかげです。

## 2-5 塙光太郎の思い出

—— 前回のインタビューで伺った塙光太郎さんについて調べてみたところ、白井厚編『アジア太平洋戦争における慶應義塾関係戦没者名簿』（慶應義塾福祉研究センター、二〇〇七年）の中に、塙光太郎さんが載っていました。

**縫田** うれしい。これが塙さんの写真です。夫（縫田清二）は三井物産に勤めていたのですが、塙さんの弟が三井物産にいて、その方が夫に、結婚する前ですが、託けた写真です。何で知ったのかわかりませんが。

塙さんは飛行機だから、飛行機が墜落したのだから、あまり大変ではなかったと思うのですが。惜しい人ですよ。みんなこういう

人たちがね。『名簿』を見ながら) 亡くなった場所はギルバート諸島ですか。マルタ島と聞いていました。貴重なものをありがたうございます。

## 2-6 帰国をめぐる

——「太田日記」昭和二〇(一九四五)年一月二六日付に配給の問題についての記述が出てきます(『紀要』二七、一一五頁)。当時、蘇州は配給だったのでしょか。

**縫田** 知らないです。蘇州の生活はほとんど知らないのです。その記述を見ると、日本人は配給だったのでしょか。

—— ちようどそのころの日記(一月二七日付)に、帰国の話が出てきます(『紀要』二七、一一六頁)。「生涯」や縫田さんがお書きになられたものからしますと、お父様が帰国を勧めたということなのでしょうか。

**縫田** 無理やりです。私は六月までいたかったです。学期が六月で終わりますから。そうすると、丸二年勤めることになるのです。父は日本に帰るついでに私を連れて帰ろうとしたわけです。それが三月のことで、がんばって反対したのです。もともと六月には帰ろうと考えていました。東京が空襲になり、母が一人ですから、帰らなくてはいけないと思っていました。

日記には結婚のことが書かれているようですが、結婚する意志があったかどうか、相手もいけませんし、塙さんはいなくなってしまうから(笑)。

—— 当時、帰国することは難しかったのでしょうか。「太田日記」

二月二五日付に、「嘩子からの快信でも、上海では一般の帰国が益々六ヶ敷くなって来たとの事。蘇州の居留民となってゐるものの、嘩子が果して同行して帰国出来るか多少気になって来たものである」(『紀要』二七、一三三〜四頁)とあります。

**縫田** 帰国は難しくなっていたと思います。船がなかなか取れなかったようですが、父は仕事柄、取れたのでしょか。一応、軍関係ですから。一緒にいたYWCAの方々は残っていました。

三月帰国は無理やりですよ。本当に帰りたくなかった。父は何か月か一度、帰国することになっていて、三月はちようどその時期でした。ですから、この次はもう危なくなると判断したのではないでしょか。一人で帰すわけにいかないから。父は戦況がわかっていたのでしょか。私には戦況がどうなっているのかわかりませんでした。

—— 戦況はよくわからなかったですか。

**縫田** 暢気なものですよね。負けるとは思わなければ、移動が難しくなるということは厳しいということですね。

当時、帰りたい人は上海からの船がとれなくて、北回り、つまり鉄道で北京から満州へ行って船で帰るのです。船は危ないというので、この北回りの方がいいという人もいました。帰る時に、船は沈められるかもしれないから、貴重なものは陸から送った方がいいというので、資料など荷物は北京経由で送りました。もともと着かなかったのですが、本人がいなかったからかもしれないですね。ですから、当時は船の数も少なくて、券を取るのも難しかったようですね。特別の手がないと無理だったのでしょか。それは役得ですね。

——「太田日記」三月二日付には、「瞳子から身分証明用の写真を送って来た。上海では十七歳以上の男女は動けなくなつたとかで心配して来た。自分の予測が意外に早く来たのに自ら驚いた。いよ／＼決戦の決戦態勢で、行くところまで行く」（『紀要』二七、二二六頁）という記事もあります。

**縫田** そのことは記憶にないです。行動の制約があつたのかもしれないですね。領事館は日本人の行動を把握してないといけませんから、そういう関係があつたのかもしれませんが。

## 2-7 戦時中を考えていたこと

——昭和二〇（一九四五）年三月に帰国されて、就職の問題が出てきます。お父様は日本放送協会への就職に反対なのですが、その際に疎開がひとつの理由になつていようです。

縫田さんは疎開するという意思はなかつたのでしょうか。

**縫田** 私は変に愛国少女なところがあつて、お国の役に立つていたいと思うところがあつたのでしょ／＼ね。

——「太田日記」にも、そういう記載があります。六月四日付に、「ペビーの放送協会に本日から出ることを遂に許さざるをえなくなつた。本人の強い意向、愛国の熱情から生れたこの希望は抑へる術がなかつたのである」（『紀要』二八、一四六頁）とあります。

**縫田** 本当に愛国少女で、今言うのもどうかと思うのですが、中国に行く前も、一二月八日は宮城の前に一人で行っていました。

上海に行つてからも、給料は安かつたのですが、その中から、塙さんが飛行機に乗っていたからでもあるのですが、海軍に毎月、献

金を持つていきました、匿名で。愛国少女なのですよ。

——昭和二〇年の五、六月というと、空襲も激しくなり、いつ負けるかわからない状況だと思つたのですが、それでも勝つてほしいということなのでしょう。

**縫田** いや、私はアメリカ最前なのです。その頃の日記には、「日本負けるな、アメリカ負けるな」と書いてあります（笑）。「鬼畜米英」なんていう気持ちはないのです。両方負けるなです。立教でアメリカ人の先生から教育を受けているでしょう、「鬼畜」ではないのです。先生をとて尊敬しているわけです。学校も民主主義でしたから。

放送協会にせっかく入つたし、とくに放送に興味があつたわけでもなかつたのですが、友達もいるので、疎開したくなかつたわけですね。

**縫田** 心配。久我山は郊外で安心なところですが、そこからわざわざ激戦地へ行くわけですから（笑）。交通がストップして、歩かなければならない場合もあるのです。それは女性一人で大変なことです。から、親は心配でしょうね。何も放送局に行かなくてもいいと思つたでしょう。

——「日本負けるな、アメリカ負けるな」というお考えは、当時としては特殊なのでしょう。

**縫田** クリスチャンなど、キリスト教の教育を受けた人はそういうところはあるのではないのでしょうか。

——学校の中でそういう話はされたのでしょうか。

**縫田** 学校では、そういう話はしません。アメリカ人の先生からの教育で、学校もアメリカからの寄付でしょう、ですから敵愾心は起

こらないですよ。学校で接する人は宣教師ですから、洗脳されている(笑)。

—— この戦争はもうだめだと思われたのはいつ頃でしょうか。

**縫田** あまりわかりませんでしたね。同盟通信に行っていましたから、降伏する前後はわかっていますが、それまではどうでしょうか、父もそういうことは言いませんでしたし。

ですが、父は大本営発表を不愉快がっていましたね。今でも覚えていますが、父は大本営発表を不愉快がっていましたね。今でも覚えていますのは、新聞のベタ記事で、新聞の片隅に「日本軍撤収」という記事が小さく載るのです。ある時、今でも鮮明に覚えています。が、こういうベタ記事をよく見なさいと、これが本当の記事だよと教えてくれたのです。大本営発表は何機撃墜、無事帰還で、勝利、勝利とあるけれど、本当の真実はこちらにあるのだよと。記事の読み方を気をつけなさいと、新聞を見ながら教えてくれたのを今でも覚えています。父はわかっていたのでしょうかね。

## 2—8 同盟通信への出向

—— 当時、外信部には、いろいろな情報が入ってくるわけですか。

**縫田** 当時、同盟通信に派遣されていたのですが、私たちが同盟でやっていたことは、派遣されていたNHKの責任者が、同盟に入ってくる情報のうち放送に出すものを選び、原稿に書き直してNHKに持っていくという仕事です。そのNHKに届けに行くのが、私の仕事でした。NHKには、海外放送の担当が中国語、英語、フランス語、ドイツ語といるのですが、届けられた情報が原文から翻訳されるのです。

同盟は戦後、共同と時事に分かれるのですが、私は一時、時事通信に行ったのです。NHKを辞めて。NHKの海外局から出張していた部長が時事通信に行かれて、私は引つ張られたのです。もう海外局はなくなるのだから、NHKにいてもだめだから、時事へ来い。と。

ひと月位いたかな。でも、全然仕事が面白くなかったのです。NHKにはよく行っていたのですが、ちょうどその頃、海外局で英語のできる人は皆辞めてしまっていたのです、給料のいい仕事へ移ってしまったのです。それで帰ってこないかと誘われて、人事部へ行ったら、辞表がまだ残っていたので抜いてきてしまいました(笑)。だから給料を二、三カ月両方からもらっていました。それで平気な顔をしてNHKに帰ったのです、時事通信には申し訳ないけれど(笑)。どっちにいても、役立たずなのですが(笑)。

—— まだお若いですがものね。今は立派なキャリアをお持ちだから笑い話になりますか。

**縫田** うちの普通の家庭と違うでしょう、普通は娘に躰をしますが、うちは勝手なことをさせていましたから(笑)。

—— 空襲が激しくなる中で、都心に勤める女性はありませんか。

**縫田** 親が許しませんよね。普通は親の言うことを聞くのではないのでしょうか(笑)。

## 2—9 留学生のその後

—— 留学生のことですが、「太田日記」昭和二〇(一九四五)年六月五日付に「大東亜学寮の魏中光君が近日帰国するといふので、

不用の品々を持ってやって来た」（『紀要』二八、一四七頁）という記事があり、また六月一〇日付にも、「いよく今日、葉（可清）君は帰国のため我が家を出て行く」（『紀要』二八、一四九頁）とあります。

**縫田** 葉兄弟が留学生の一番中心的存在でした。早稲田へ行っていました。葉兄弟が最初に来て、いろいろな友人を連れてくるようになりました。戦後もよく来ていたのですが、離婚されて、足が遠くなつたようです。葉兄弟は台湾へ帰りました。魏中光さんも台湾ではないですか。

——『生涯』によりますと、「当時中国留学生は京都に集められ保護監視される状態にあった」とあります。

**縫田** そうですか、それは知りませんでした。

## 2-10 敗戦前後の日々

——「太田日記」昭和二〇（一九四五）年六月二五日付に、「夕方方ベビーが帰って来て、沖繩戦で遂に玉砕したことを話したが、本日本営の発表があった」（『紀要』二八、一五六頁）とあります。

**縫田** そうでしたか、それは覚えがない。そのように聞いて、父に報告したのでしょうか。私にはピンとこなかったのかもしれない。でも、父は驚いたのでしょうかね、いろいろなことを知っているから。——このような情報は、大本営からくるわけですか。

**縫田** 大本営から同盟通信へ、同盟通信からNHKに来るのです。大本営からNHKの報道の方へも情報はいつているのではないのでしょうか。私の場合は同盟に出張していましたから、同盟から情報を聞

いていました。

——「太田日記」八月三日付に、「塩や醤油等の調味料の不足には一番閉口であるが、郷里には之が得られるので一度貫ひに出かけやうかといへば、嘩子はパパの時局認識が足りぬ、今の大人は駄目だと大いに攻撃した。實際今の若い者にはこの点敵はない。理論では大人が負けである」（『紀要』二八、一七四～五頁）とあります。

**縫田** 私は愛国少女なんです。生意気ですね。しょうがない娘なんです。両親もよく我慢していましたね（笑）。

## 2-11 無条件降伏を知る

——敗戦が近づいてきて、「太田日記」昭和二〇（一九四五）年八月一〇日付に「嘩子が帰宅するや否や玄関で無条件降伏と叫んだ。嗚呼、何といふ衝撃であつたらう。昨日の御前会議で陛下は之に御同意遊ばされたといふ」（『紀要』二八、一七八頁）とあります。

**縫田** それはよく覚えていません。その頃は同盟でも、皆お酒を飲んで大変でした。やけ酒。お酒がどこから来たか知りませんが。男性たちは荒れていましたね。発表になる二、三日前からね。

——縫田さんにとつては、どんなお気持ちでしたか。

**縫田** 玉音放送が終わってからですが、これから日本はどうなるのかと、もう立ち上がれないのではないかと、悲観的な日記を書いています。玉音放送はNHKに帰って、海外局で聞きました。それはやはり、ショックでしたね。

——いち早く、戦争に負けたことを知っていたわけですね。  
**縫田** 知っていました。電車に乗っても、誰もまだわからないでしょ



う、ですから複雑な気持ちでしたね。言えるわけではないからね。あの時のことは、はっきりと覚えています。

——「太田日記」八月二二日付に、「夜は久し振りに一家でしるこを食べた。暁子がしるこの禁を解いた」（『紀要』二八、一八五頁）とありますが、この頃になると敗戦のショックから落ち着かれたのでしょうか。

**縫田** うれしかったのではないのでしょうか。私は早速、ズボンを止めて、スカートを履きましたから。そうしたら車で怒られて（笑）。ちよほど同盟に勤めている人が通って、助けてくれたのです。

世の中は殺伐としていましたね。本にも書いてあると思うのですが、辞めようと思ったら、父がこれからは女性が活躍するのだから、辞めるなど言ったのを覚えています。

## 2-12 価値観は変わったか

——縫田さんご自身は、敗戦によって価値観は変わられたのでしょうか。

**縫田** 変わっていない。私の人生で一番の幸せは、価値観が変わっていないということです。

——それは立教女学院からの教育ということですか。

**縫田** それと家庭の教育です。敵国の中国人留学生を招いているでしょう、ですから友人から、あなたの所へ中国人がよく来ているけれど、怖くないかと言われたこともありました。

——戦後の民主化も違和感はなかったですか。

**縫田** ないですね。

——女性の地位の問題とかはどうですか。

**縫田** それについては、当時は考えていませんね。女性問題はもっと後です、私の頭に出てきたのは、占領中にもあったかな、多少あったかもしれないですが、価値観は変わっていないですね、基本的なこととは。それが私の一番の幸せだと思っています。

——価値観が変わらなかつたというのは、学校教育、家庭教育、そして中国と日本の関係を身近に感じる環境であったということでしょうか。そういう意味では、特殊ですね。

**縫田** 特殊ですね。うちはよく客が来てましたから。

——お客さんがいらつしやるということですが、戦争中は配給生活だと思うのですが。

**縫田** うちは庭が広がったですから。終戦後、父は畑ばかりやっていました。留学生が芋ほりを手伝ってくれたりして。買い出しは買ったことがないのです。物を持って行って、物々交換するといった経験はありません。

——愛国少女というのは、軍国少女ではないわけですね。

**縫田** いや、軍国少女ですよ（笑）。

——天皇に対する価値観はどうだったのでしょうか。

**縫田** 二重橋に行くくらいですから。それと戦時中はバスが宮城を通る前は、バスガールさんがお辞儀しましたよと号令をかけるのですが、私はその前にお辞儀をしていました。学校も家庭も皇室をよくに敬うというわけではなかつたのですが、何ででしょうかね（笑）。

——「太田日記」昭和二〇（一九四五）年九月五日付に、「暁子が帰宅しての話に、中央通信の陳博生君が日本に来てるといふ。吃驚



した。何故自分を探し求めてくれないのであらうかと、聊か不満を覚えた」(『紀要』二八、一九三頁)とあります。

**縫田** 陳博生は留學生ではないですね、仕事の関係ではないでしょうか。

——「太田日記」一二月九日付に「ベビーが帰国の船中で友達となつた押田元陸軍大尉が友人を連れて訪ねて来た」(『紀要』二八、二三四頁)とありますが、押田大尉とはどういう方ですか。

**縫田** 軍医です。戦後、押田さんともうひとり素敵な男性がいて、三人でよく遊んでいました。かなり後のことですが、銀座だったかで個展をやっているという情報を知って、久しぶりに再会しました。上海から帰る船の中で親しくなつた方です。

## 2-13 太田宇之助の総選挙出馬をめぐる

——お父様の総選挙への出馬についてですが、「太田日記」昭和二〇(一九四五)年一月一七日付に、「今朝九時駒吉氏をその私邸大井町に訪ねた。：最近数年間の予の経歴と現在の心境とを詳細に語り、社会党に興味を持ち、政党ならば之に関係を持ちたい希望を述べた。又総選挙に出る意思は決せぬが、場合によってはその決心を為す旨をも申し添へた」(『紀要』二八、二二四頁)とあります。

お父様は戦前から無産政당을支持していたのでしょうか。

**縫田** 覚えていませんのは、私がまだ学生で、選挙のこともわからないう時でしたが、父に誰に投票するのかを尋ねましたら、鈴木茂三郎と答えました。後の社会党左派です。だけど、選挙の時にお世話になつたのは松岡駒吉です。社会党右派です。

——選挙から出るということであれば、やはり社会党ですか。

**縫田** 父はそうでしょうか。

——後々はどのようなのでしょうか。社会党支持者ではなくなつていったのでしょうか。

**縫田** 知りませんが、そうでしょうかね。親しい人は緒方竹虎<sup>33</sup>さんと、自民党が多いです。新聞社の関係ですね。

——お父様が選挙に出ようというのは、戦後になって初めて出てきたのでしょうか。それとも戦前から。

**縫田** 戦後です。突然言い出したのです。私は猛烈に反対しました。私の日記では、昭和二二(一九四七)年三月に父から選挙に出ることを聞いているのですが、昭和二〇年に言い出していますか。それは知りませんでした。

——朝日新聞を辞めて、蘇州へ行かれた頃から、政治家に関心を持たれたということではありませんか。

**縫田** そういう感じはありませんね。選挙に出ることを聞いて、唐突な感じを受けて猛烈に反対した記憶があるくらいですから。母も反対しました。昭和二二年三月に、父が網干<sup>34</sup>から帰って立候補すると言つたと日記に書いてありますが、私にとつては突然のことでした。

——では、昭和二〇年の段階の選挙の話はご存じないのですか。

**縫田** 知らない。記憶にはありません。

——昭和二〇年段階では、資金面と網干のお兄様の協力の問題で断念されています。

**縫田** 昭和二二年の時に、改めて網干へ行つて、その目星がついたのでしょうか。それで家族に初めて言つたのでしょうか。

父は政治家タイプではありません。母が気の毒でした。私は一度も応援に行きませんでした。縫田（清二）だけが、まだ結婚前でしたが、頼まれて行きました。結果は僅差の次点でしたから、その時は悪かったなと思いました。私がもう少し応援してあげればよかったかなと。反対だけで、何もしませんでしたから。

—— お兄様は応援されたのですか。

**縫田** 兄はこの時、日本にいなかったのではないのでしょうか、記憶がありませんから。縫田だけが手伝っていました。よくやっていましたよ。網干にずっと行って。母と縫田だけが網干に行って手伝っていました。母のためにはよかったです、政治家にならなくて。

—— 「太田日記」昭和二〇年二月二日付に、選挙の資金の件で「長谷川佳平氏に相談する」とあります。長谷川佳平とはどういう関係だったのでしょうか。

**縫田** 芦屋の方です。資産家で、父がよく世話になった方です。あちらに行った際は、ご挨拶と一緒に連れていかれたこともあります。裕福なお宅という記憶はあります。実業家でしょうね。

一度泊めていただいたことがあるのですが、搔卷というのがありますね、布団に。搔卷がわからなくて母に、このお宅は布団がないからどてらがあるのかしらと聞いたことを覚えています（笑）。長谷川さんというと、そればかり思い出します。東京に来られた時は、よく久我山に来られていました。父ととても親しかった方です。

—— 選挙のことですが、お父様が亡くなられる一年前の昭和六〇（一九八五）年七月の東京都議会議員選挙について、開票の結果、投票した仁木は当選、自民が大勝、社会大敗は気持ちがいいと、日

記に書かれています。

**縫田** 自民党の大勝が気持ちがいいの？ 選挙の時に社会党にお世話にならなかつたから、恨みがあったのかな（笑）。社会党はよくやってくれなかつたから。もつとも社会党に何もしてないのですが。きつと社会党には好意を持ってなかつたのかもしれないですね。

—— 選挙の時は、お父様は何を公約にしていたのでしょうか。

**縫田** 知りません。外交ではないでしょうか、中国との問題。応援して下さったのは重光葵さんですが、やはり中国問題ですね。

—— 中国問題では、なかなか難しいのではないのでしょうか。

**縫田** そうですよ。普段から地元にいるわけでもないし。弁が立つならいいですけど、全然そういうタイプではなくて、クソまじめな人間でしたから。だから全然ダメですよ、あの人は（笑）。

## 2-14 政治家への誘い・大使就任を断る

—— 縫田さんはどうですか、政治家の話はありましたか。

**縫田** あります。でも縫田が、政治家だけはやめてくれと言いました。私もなる気はありませんが（笑）。

—— 大使の話もあつたそうですね。

**縫田** それも断つて。藤田たき先生からも言われたことでしたが、藤田先生から覚えめでたくないのは、何でもかんでも先生の言うことを聞かなかつたからなのですが（笑）。外務省に呼ばれて、審議官に会いましたが、断りました。そうしたら断りっぷりがいいから、どうしても次官に会ってほしいと（笑）、同じことだからと言うのですが。それでまた次官に断るために会いに行きました（笑）。

—— どうして断られたのですか。

縫田 私には向かないですから。そんな能力ないです。

—— どこに行くか国名もわかっていたのでしょうか。

縫田 ご希望に沿いますと言っていました。断りました。

## 2-15 著作について

—— 縫田さんのお書きになられた『情報との出会い』を読みましたが、こ言う表現は失礼かもしれません。とても素直な方だという感想を持ちました。NHKの解説委員になった際、婦人課の元上司であった江上フジさん<sup>(38)</sup>と不和になったことや、いろいろと失敗したことも書いていらっしやる。

縫田 素直ではありませんよ(笑)。

—— 前回、縫田さんの処女作について伺いました。『大陸新報』に「現地婦人と日本語教授」という論文ですが、『情報との出会い』には「中国の女学生とともに」という論文が収録されています。処女作はどのような内容でしょうか。

縫田 最初の論文は『大陸新報』という一般紙に、二本目は『婦人大陸』という雑誌に書きました。内容は同じようなものだったと思います。

## 2-16 GHQと津田塾卒業生

—— GHQ・CIE(民間情報教育局)で、津田出身の方々が英語力をかわれて通訳や、秘書として勤めていましたが、私(中武)はその方々にインタビューをしたことがあります。CIEの婦人間

題担当官だったエセル・ウィードの上司、ドン・ブラウンCIE情報課長の資料が開港資料館に収蔵されていて、私はその担当となり、外部の研究者と研究会をもつようになりました。そしてブラウンを知っている関係者にインタビューをすることになり、ウィードの下で働いていた川喜田(結婚後は伊藤)和子さんをはじめ、何人かの方々にお話をうかがうことができましたが、伊藤さんのお話特に興味深かったのです。そのインタビューを一部ですが紹介しました。<sup>(39)</sup> 縫田さんはドン・ブラウンをご存じありませんか。

縫田 CIEで直接知っている人はいません。

—— 縫田さんはNHKに勤められましたが、川喜田さんをはじめ、津田出身のこの方々はGHQで働いていました。川喜田さんは辞める時にやっとホツとしたと、やはり自分は占領者のもとで働いて食べていくのは生理的に嫌だったと、辞めて嬉しかったと語っておられました。またウィードのもとには錚々たる女性解放運動家たちのグループが入りしていたようですが、彼女たちを、そしてウィードについても川喜田さんは当時から、割とクールな目で見ていた印象を受けました。そのような方々を縫田さんほどのように見られていたのでしょうか。

縫田 別にどのようにも見ないですけど。募集してましたけれど、私は占領軍に絶対に雇われまいと思っていました。

—— それはNHKに仕事があるなしに関係なくでしょうか。

縫田 占領軍は給料もいいし、一方、NHKは給料が出なくて遅配で苦労しました。占領軍の方はNHKの給料よりずっといいのです。私がいいたのはCIEと同じビルだから、川喜田さんらが見えるので

すよ。でもCIEで知っている人は誰もいません。彼女たちも勤めていて大変だったのではうね、ホツとしたというのであれば。

—— やはり生きるため、生活のために。

**縫田** 生活のためですよ。占領軍も人手不足だったようで、ずいぶん誘いがありましたよ。ウィードは知りません。CIEには、知り合いは誰もいません。

—— 占領政策の民主化のなかで、婦人の地位向上とかありますが。

**縫田** 私にとって女性問題はずっと後です。外信にいて、翻訳ばかりしていましたので。婦人番組をしたいと言ったのも、外信にいると女性の場合、たいてい私がインタビュに行くのです。

思い出に残るのは、本にも書きましたが、ルーズベルト夫人です。ニュースとしては何秒しか出ないのです。ところが婦人番組はインタビュで一時間ほど放送するのです。外信にいたら、婦人問題は「一五秒とか二〇秒ですから（笑）。せっかくインタビュするならば、婦人番組であればまるまる放送されますから、行きたいと言ったら、江上さんが出でなさいと言ってくださって。その時は、婦人問題そのものために何かしようと思ったのではなくて、ニュースのためにいろんな方にインタビュしているうちに、江上さんの影響もあり、女性問題に取り組んだのです。これもきっかけですね。

—— きっかけを活かせるかどうか、個人の實力や努力にかかっているのではないのでしょうか。

**縫田** いや、運がいいのです。

## 2-17 縫田清二との出会い

—— 縫田さんのようなご活躍をされた方でも、運と言えるというのは。

**縫田** だって、本当だもの。どこの家庭に生まれるかというのも運じゃないですか。私は眞子さんのように生まれなくてよかったですよ（笑）。縫田に出会ったのも偶然ですものね。たまたま兄の友達で、戦争があつて、うちに遊びに来ていた人ですからね。兄の戦友です。

—— 戦争中からご存じだったのですか。

**縫田** いえ、復員してきてからです。海軍で同じ通信部隊にいました。外国の通信の翻訳などをしていました。兄とは飲み友達だったようです。縫田は母親と二人で暮らしていて、兄がいるのですが、その時はまだ戦争から帰って来ていませんでした。もともと私が上海にいる頃から、実家には遊びに連れてきていたようです。私は戦後になって、初めて会いました。

—— 海軍では、とくに危ないところへは赴任しなかったわけですか。

**縫田** 海軍に入ったばかりの頃は、青島で研修を受けたようです。その後、通信関係の仕事をしていたようですが、縫田はフランス語なのですが、仕事は英語が多かったようです。兄は英語ですが、練馬辺りに通信を受ける部隊があり、そこに配属されていました。

—— 船や飛行機の経験は。

**縫田** そういうのはないのです。兄は終戦の少し前に、南方に行く予定だったらしいのですが、終戦になったので、行かなくてよくなったようです。運がよかったですね。

—— 予定の時間を超過してしまい、お疲れのことと思います。こ

れでインタビューを終わります。二回にわたつての貴重なお話、ありがとうございました。

〔註〕

- (1) 宇之助妻、太田栄子（一八九八～一九九四）。
- (2) 一九三四年、日本文化を海外に紹介することを目的に外務省の後援を受けて設立された。戦後、国際交流基金に合併。
- (3) 嘉治隆一。朝日新聞社論説委員。後、出版局長。
- (4) 黒田清。貴族院議員（伯爵）。祖父は黒田清隆。
- (5) 伊集院清三。外務大臣を務めた伊集院彦吉の三男。戦後、桐朋学園で音楽教育に携わる。
- (6) 内藤幸子。上海日本基督教女子青年会（YWCA）総幹事。
- (7) 福幸（ふくしん）女塾（縫田暉子『情報との出会い―語り下ろし』ドメス出版、一九九九年、二二頁）。
- (8) 島田大輔「太田宇之助と大正・昭和期日中関係―中国専門記者の戦前・戦中・戦後」早稲田大学博士學位論文、二〇一八年。
- (9) 当時は立教高等女学校。所在地は東京都杉並区久我山。
- (10) 重光葵。東條内閣・小磯内閣の外務大臣。敗戦後の東久邇宮内閣で外務大臣に再任され、日本政府の全権として降伏文書に署名。
- (11) 辻政信。陸軍大佐。一九四三年支那派遣軍参謀。
- (12) 縫田清二。専門は社会思想史。横浜国立大学、成城大学教授。一九九五年没。
- (13) 一九四六年創刊の『国際中日公報』が間もなく『中華日報』となり、一九四九年『内外タイムス』と改題。夕刊専門紙。
- (14) 一九三九年に上海で発刊された華中地域を対象とした邦字紙。四五年九月廃刊。
- (15) 『大陸新報』一九四四年五月七日付。
- (16) 春野鶴子。一九三八年、上海に渡り、上海中日婦女連合会を創立し、『婦人大陸』を編集。戦後、日本に戻り、新聞記者となる。奥むめおに

共鳴して一九五〇年、主婦連合会に参加。

- (17) 主婦連合会。一九四八年、奥むめおらが始めた消費者運動団体。
- (18) 奥むめお。婦人運動家、政治家。大正期から平塚らいてうや市川房枝らの婦人労働運動に携わる。戦後、主婦連合会初代会長となる。
- (19) 縫田、前掲註7の自著。同書に収録されているのは「現地婦人と日本語教授」ではなく、「中国の女学生とともに」（『婦人大陸』一九四四年）。前者で縫田は、日本語教授がたんなる語学教育ではなく、日本と中国の相互理解に資するものであり、中国人女生徒への日本語教育に現地在住の優秀な日本婦人がたずさわることを願う、と結んでいる。
- (20) 塙光太郎。一九四三（昭和一八）年二月二五日、ギルバート諸島で戦死。
- (21) 尾崎秀実。太田が上海支局長時代の部下。妻は英子。尾崎はゾルゲ事件に連座し、一九四四年、絞首刑になる。妻と娘に宛てた獄中書簡は、戦後に『愛情はふる星のごとく』として刊行された。
- (22) 徳富蘆花。小説家。妻は愛子。
- (23) 太田宇之助長男、太田新生（一九二〇～二〇一五）。外交官。
- (24) 今井清一。歴史学者。専門は日本近代政治史。横浜市立大学名誉教授。二〇二〇年没。
- (25) 東京都太田記念館。太田宇之助が、日中友好に役立ててもらいたいと東京都に寄贈した土地（太田邸跡地）に、一九九〇年に東京都が建設した留学生宿舍。当初の寮生は北京市出身者に限定していたが、現在はソウル、台北のほか、アジア各都市にわたっている。設置の経緯とその後の活動は、東京都生活文化局都民生活部地域活動推進課編集・発行『東京都太田記念館開館25周年記念誌』二〇一六年に詳しい。
- (26) 白井勝美。歴史学者。専門は近代日中関係史。
- (27) 金平輝子。東京都副知事（一九九一～九五五年）。
- (28) 松永緑郎。埼玉県副知事（一九七六～八四年）。
- (29) 清水安三。桜美林学園創立者。
- (30) 太田宇之助『生涯―新聞人が歩んだ道』行政問題研究所出版局、一九八一年。



- (31) 緒方貞子。国連公使。第八代国連難民高等弁務官。義父は緒方竹虎。二〇一九年没。
- (32) 松岡駒吉。労働運動家。一九四五年二月二日、日本社会党結成大会議長。
- (33) 緒方竹虎。朝日新聞副社長。国務大臣。自由民主党総裁代行委員。
- (34) 兵庫県揖保郡網干町。一九四六年に姫路市（網干区）となる。
- (35) 長谷川佳平。日華製紙株式会社社長。日本歯輪株式会社社長。
- (36) 仁木清二郎。東京都議会議員（自由民主党）。
- (37) 藤田たき。女性運動家、教育者。戦後、労働省婦人少年局長や津田塾大学長、国際婦人年世界会議の日本首席代表を歴任。
- (38) 江上フジ。戦前にNHKに入局し、戦後は「婦人の時間」など婦人番組を手がけた。初代婦人課長、婦人少年部長、考査室長を歴任。
- (39) 伊藤和子「CIE情報課の日本人スタッフとしての日々」（横浜国際関係史研究会・横浜開港資料館編『図説 ドン・ブラウンと昭和の日本』有隣堂、二〇〇五年、八五頁）。伊藤は一九五一年にCIEを辞めた後、弁護士となった。二〇一九年没。なお、伊藤らウィードの下で働いていた日本人女性スタッフは、占領終了後もウィードと交流をもち、ウィードが亡くなるまでつづいた。
- (40) 秋篠宮家長女。二〇二二年一〇月、結婚により皇籍離脱。

**横浜開港資料館紀要**  
第三八号

令和四年三月三十一日発行

編集——横浜開港資料館

〒231-0021 横浜市中区日本大通3  
TEL045(201)2100

発行——公益財団法人

横浜市ふるさと歴史財団

印刷——株式会社佐藤印刷所